

2022. 10. 9. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書8章49～56節
『委ねるという作業』

10月も半ばになり、ついこの前まで「暑い、暑い」と口にしていた頃が嘘のように過ごしやすくなってきました。しかし、このことは何もわたしたちの努力のためものというわけではなく、自然の摂理を思い起こさせる季節の移ろいであることをおぼえるのです。巷の神社仏閣では秋祭りが盛んに催され、コロナ禍でなければもっと賑わいをみせるのが毎年の恒例です。家内安全商売繁盛を祈る人々の姿はある意味、ほほえましくもあるものです。ひたすら手を合わせて「救い」を祈るのです。確かに宗教性というものは救いを希求するものです。その救いは具体的です。個人の努力に比例してプラスされるように、人々は健康や人間関係、果ては恋愛の成就まで対象にします。しかし、キリスト教の救いが問題にするのは人間の弱さの解決ではないのです。それは、救いを求める者に逆に、救われねばならない自己の発見を迫りながら、自己を見つめる真実さを問題にしているのです。

本日の聖書の箇所は厳密には40～42節 a から始まります。途中、「イエスの服に触れる女性」の話を介入させて、物語の緊迫さや慌ただしさを盛り上げています。

さて、ここでは死からの復活に関する奇跡物語が描かれますが、もともとのモチーフは初代教会が向き合っていた課題です。それはユダヤ人キリスト者によって請求される民俗宗教への回帰でした。つまり、ユダヤ人が慣れ親しんだ古来からのシステムの復活です。律法と同じく、遵守すべき「福音」の文言を掲げて、それを軸に従来通りピラミッド型の社会構成を展開せよというのです。福音を律法のように定型化した「見える信条」にすれば、すがり易いし、それによって人の弱さは解決されるというのです。

ルカは、それらの初代教会内部の福音の崩壊に繋がるリスクをどう克服したのかを奇跡物語になぞらえて解答してゆきます。ルカはまずマルコ5章21～43節の記事を参照して描きます。49節で「娘は死んだ」という報に接し、衝撃を受ける父親に対してイエスは「恐れるな。信じなさい。」と言います。日本語

では表現されていないのですが、原文ではマルコは文字通り「言う」のです。この言葉はただ単に当時の慰めの慣用句にしか過ぎません。

しかし、ルカは原文では「言う」のではなく、「応える」という言葉をあえて使っています。嘆きと悲しみに打ちひしがれる父親の姿に対してまさしく「応える」のです。さらにイエスは「娘は救われる」というこの父親への個別の慰めの言葉を慣用句の後に加えたと記します。

わたしたちは「見える事実」にだけ寄りすがります。当時のユダヤ教が福音という「救い」を具体的な請求の対象としてしか掌握出来なかったことと同じなのです。

ルカはそんな理解に対して福音の質を迫ります。それは応答関係なのです。事柄は悲しみや絶望で終わる閉塞されたものでは決してないということなのです。ルカは、イエスこそいつもご自分の側から、言葉をさえ失うわたしたちに歩み寄り、十字架と復活の愛を以て応えて下さる方であり、個別の慰めといたわりを以て寄り添って下さる方であることを宣言するのです。

ここに「委ねる」に足る神へのもうひとつの「見えない事実」への踏み込みが提案されて行くのです。